

観察記録

## 和気町内での秋のタカ渡り期における クマタカの観察記録

齊木 孝<sup>1)</sup>

An observation record of Mountain Hawk-Eagle *Nisaetus nipalensis*  
at the stage of autumn hawk migration in Wake-Town, Okayama prefecture, Japan

Takashi SAIKI<sup>1)</sup>

キーワード：秋のタカ渡り，クマタカ，和気町

### はじめに

クマタカ *Nisaetus nipalensis* は、一般に季節的な移動をせず、周年同一地域に生息するので、平野部で見られることはほとんどなく、少なくとも秋の渡りシーズンに、クマタカが渡っていったという確実な記録は1回しかない（森岡ほか，1995），あるいは，渡りの時期に，ごくまれに生息地以外の場所で渡りのような移動が確認される例などがある（樋口，2013）ことからわかるように，渡りのような移動をおこなうことはきわめて少ない鳥である。

筆者は2024年9月，これまで観察記録のない岡山県和気郡和気町（以下，和気町）において，秋のタカ渡り観察時にクマタカ1羽を確認した。前述のとおり，まれな記録と考えられるので概要を報告する。

### 確認概要

2024年9月23日，岡山県自然保護センター友の会の行事として，和気町矢田地内の吉井川左岸の土手において「秋のタカ渡り観察会」が開催された。同所一帯はハチクマ *Pernis ptilorhynchus* を主体とするタカ類の渡りルートとなっており，筆者が約30年間ほぼ毎年観察をおこなってきたエリア

である。

一帯は，標高400 m前後をピークとする低山とその尾根が丘陵状に連続し，尾根の一部は，麓を南北に流れる一級河川の吉井川近くまで迫り，平野部の少ない地形となっている。特にタカ類が好んで旋回，上昇するポイントは，吉井川がヘアピンカーブ状に東西に大きく蛇行するところで（写真1），尾根の斜面にぶつかった風により上昇気流が発生しやすい地形と考えられる。

観察日の天候は，前日には秋雨前線や台風14号崩れの低気圧により全国的に雨であったが，当日は晴天となり渡りの観察には好条件と思われた。

現地に到着直後の午前8時15分頃に，東に見える低山の上空にてハチクマ10羽の群を，8時40分頃にハチクマ単独個体を観察し，いずれも観察地点の上空付近を経て西方に滑翔していった。

その後しばらくはタカ類が観察されなかったが，9時45分頃に参加者の一人が付近の尾根上空を旋回する1羽の大型タカ類を見つけたので，ハチクマの可能性を念頭に置きながら10倍の双眼鏡で観察した。しかし，ハチクマにしては頭部の突出が小さく，翼の幅がより広いことからクマタカが疑われ，望遠鏡で確認したところ，クマタカであることは間違いなかった（写真2）。

和気町内では初確認だったことと，タカ類の渡

1) 岡山県和気郡和気町 Wake-town, Okayama prefecture, Japan.



写真1. タカ渡り観察地点（白丸）周辺の地形とクマタカが飛翔したと思われるエリア。

りルートでの出現であったことから、次はどの方向に飛び去るかに注目し、見逃さないよう慎重に望遠鏡で追跡したところ、旋回、上昇しながら少しずつ西方にシフトし、滑翔に移ってからは最終的に西南西方向にある低山の稜線を9時56分頃に越えて消失した。

### 考 察

今回、これまでに確認例のない和気町で、クマタカがタカ類の渡り時期にハチクマなどと同じ渡りルートでなぜ観察されたのかについて、若干の考察をおこなった。

#### 1. 周辺の定着個体が飛来した可能性

県内のクマタカの生息状況について取りまとめられたものは把握していないが、環境省の環境アセスメントデータベース（以下、EADAS）で公開されている「風力発電における鳥類のセンシティブティマップ（陸域版）」に「重要種」としてクマタカ全国分布図（以下、分布図）が10 kmメッシュ（以下、メッシュ）で示されている。この中から岡山県エリアを抽出したものを図1に示した。

分布図は今から20数年前に行われた希少猛禽類調査のデータ（日本鳥類保護連盟，2004）が基礎になっているものと思われ、必ずしも現時点における県下全域の状況を正確に反映したものではないが、筆者が把握している複数の地域で現在でも通用するメッシュもあるので、一定程度の参考にはなると考える。

今回の和気町内の観察地点を図1に赤丸で示したが、この地点を含む県南東部には基本的にメッシュが存在しないことから、分布図作成当時に生



写真2. 出現したクマタカ（内田和樹氏撮影）

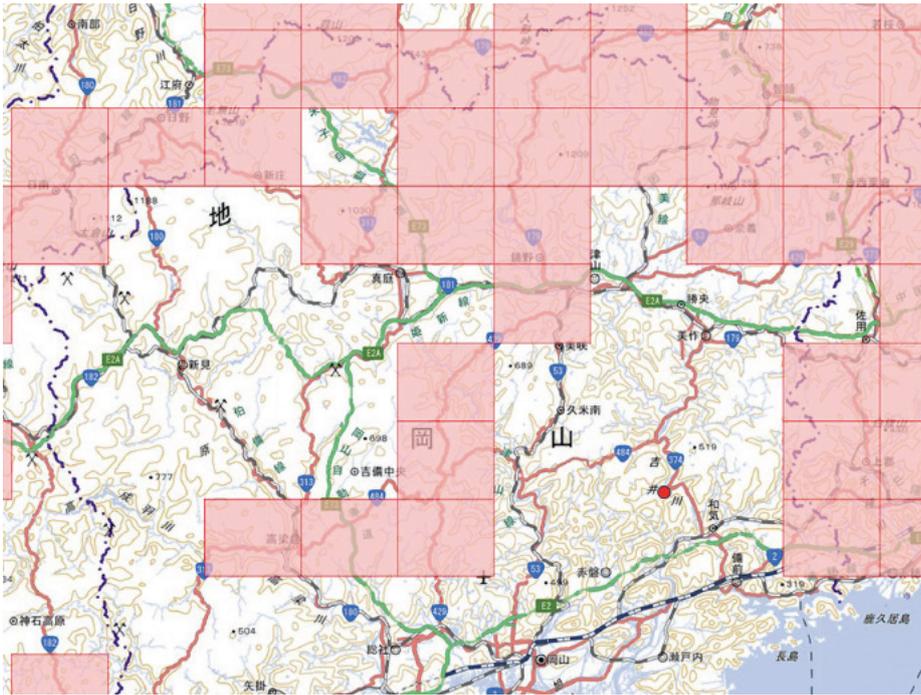


図1. クマタカのセンシティブリティマップ (EADASより岡山県部分を抽出) ※赤丸は今回の観察地点。赤丸は今回の観察地点。

息記録がなかったものと考えられる。ただし、兵庫県南西部においてはメッシュが存在することから、本県南東部の兵庫県境付近については、行動圏の一部が存在する可能性がある。しかし、今回のクマタカは西方に飛び去ったことから、和気町より東側に生息する個体が飛来したとは考えにくい。

また、岡山県中央部南寄りにもメッシュがあるが、今回の観察地点からは約20 km以上離れており、一般的なクマタカの行動範囲とされる20–40 km<sup>2</sup> (山崎, 2010) からは相当な距離があることから、定着個体が現在も生息しているとしても、今回飛来した可能性はかなり低いと思われる。

## 2. 分散移動の可能性

分散には、生まれた場所から初めての繁殖地まで移動する出生分散と成鳥がある繁殖地から異なる繁殖地に移動する繁殖分散があり、一般に前者は後者よりずっと遠距離の移動をとめない、近親交配を避け、競争を緩和し、分布を拡大する利点があると考えられている (樋口, 2013)。

今回撮影されたクマタカは、腹部や顔の色など形態的に見て幼鳥ではない (井上・守屋, 私信)

が、若い個体も成鳥も、ペア形成していない個体はいろんな場所で見られており、これらが分散個体と呼ばれる (井上, 私信)。

分散個体の移動距離については、北海道東部において電波発信機を装着しておこなわれた約3年間の追跡調査 (坪川, 2007) で、クマタカ亜成鳥 (2003年2月の捕獲時推定3.5歳) が、放鳥から2か月後に76 km離れた地点に移動し、2004年1月1日までは同地点から3–4 km以内で確認されていたが、同年1月13日には行方不明となり1月17日

に112 km離れた地点で確認されている。その後2006年4月に放鳥地点から72 kmの地点で繁殖が確認された。また、幼鳥 (2003年3月の捕獲時推定1歳未満) は、同年11月に放鳥地点から107 km離れた場所で確認され、2004年2月には放鳥地点から102 kmの地点で死亡 (鉛中毒による) が確認された。

一般的にクマタカは定住性が強いが、親別れした幼鳥は成長しながら、繁殖にふさわしく、種間干渉や人為的圧力のない好適な生息地を求めて滞在、移動を繰り返すようである (坪川, 2007・樋口, 2013)。

今回のクマタカも分散移動の途上であったと思われるが、今回の写真からは年齢推定が出来ないことや分散移動距離には大きな幅があるために、この個体の巣立ちの時期や場所などは推測できない。

## 3. 和気町内の渡りルートでの出現の背景

クマタカは留鳥として、北海道から九州まで日本の山岳森林地帯に生息する (樋口, 2013) ことから、一般的には分散移動ルートも食物資源の豊富な比較的標高の高い山地帯が主体と考えられる。

しかし一方で、分散の移動距離は、前述のとおり100 km前後と長距離に及ぶ場合もあり、その移動過程において低標高の地点を通過することも当然起こり得る。

今回のクマタカは、これまで生息が確認されていない和気町において、主にハチクマ主体のタカ渡りルート上（標高約170 mの低山上空）において観察された。

一般にタカ渡りルートは、地形的な要因等によりタカ類の帆翔に有効な上昇気流が発生しやすい地点が選ばれ、今回の渡りルートにおいても、筆者はこれまで同所でハチクマの他にサシバ *Butastur indicus*, ノスリ *Buteo japonicus*, ハイタカ *Accipiter nisus* などの渡りを観察している（未発表）。

クマタカは、同所では初めてであったが、公開されている「タカの渡り全国ネットワーク」の調査定点のうち、日本野鳥の会愛媛などが毎年調査している佐田岬権現山では、クマタカが2022年9月8日（若鳥）、2024年9月12日（推定3歳）、同年10月5日（同一個体）に観察されている。調査者の岩本によれば、未発表事例も含め、出現したクマタカは通常は当日や数日以内（2024年は長め）には東行きし、四国山地に戻っているものと思われる。今のところ対岸の佐賀関城山での渡り記録はないとのことである。また、比較的若いクマタカが出現する理由として、愛媛県西部におけるサシバの渡りは、幼鳥が多い初期には本来の方角である南西（大分県鶴御崎）方向ではなく、ハチクマと同じ西（佐賀関）に渡る個体が多いが、成鳥が主体となる渡り終盤に向けて本来の方角へとシフトしていくこと、逆にハチクマは、幼鳥が多くなる渡り終盤に、サシバの群に付いて佐田岬より南の高茂岬まで来た幼鳥が、サシバの向かう南（宮崎）方向ではなく、迷いながらも西向き（大分方面）に軌道修正して渡って行くことが確認されており、クマタカについてもタカ類の渡りに影響を受けて出現する可能性を指摘している（岩本、私信）。

筆者も、タカ類の渡りでは、同種、異種にかかわらず、先行して旋回・上昇するタカ類の群（いわゆるタカ柱）の位置を後続のタカ類が視認し、そこに向かってできるだけ短距離の飛行をすることで、遠回りによる体力消耗をできるだけ少なく

していると考えており、今回のクマタカも分散移動の過程で視認したタカ類の渡りルートにどこかで合流し、そのまま和気町に到達したものと推測している。

以上を要約すると、今回観察されたクマタカは、岡山県内や近県で定着している個体が遠路飛来したということではなく、長距離を分散移動する過程で見つけたタカ渡りルートに合流し、そのまま他のタカ類にならってルートを移動して来た可能性が高いと推察される。

## 謝辞

バードリサーチ 守屋年史 氏には、全国での観察事例を探索するアイデアや移動分散調査の報文紹介などを助言いただいた。クマタカ生態研究グループ 井上剛彦 氏には分散に関する知見等について助言をいただいた。日本野鳥の会愛媛 岩本忠義 氏にはタカ渡りルートにおけるクマタカ観察事例等を教示いただいた。内田和樹 氏には貴重な写真を提供いただいた。記して謝意を表する。

## 引用文献

- 井上剛彦, 2013. クマタカの移動・分散, 行動圏と環境利用. (樋口広芳 編) 日本のタカ学. 145-164. 東京大学出版会.
- 環境省, 2018. 環境アセスメントデータベース EADAS. 風力発電における鳥類のセンシティブティマップ (陸域版). 重要種. <https://www2.env.go.jp/eiadb/webgis/index.html>, 2024年11月2日閲覧.
- 環境省自然環境局野生生物課, 2012. 猛禽類保護の進め方 (改訂版) —とくにイヌワシ, クマタカ, オオタカについて. 環境省.
- タカの渡り全国ネットワーク. 今シーズンのリアルタイム情報. <http://www.gix.or.jp/~norik/hawknet/hawknet0.html>, 2024年10月31日閲覧 (タカの渡り全国ネットワークホームページ).
- 坪川正己, 2007. 北海道東部におけるクマタカの移動分散事例. *Strix*, 25: 133-139.
- 日本鳥類保護連盟, 2004. 希少猛禽類調査 (クマタカ編). 日本鳥類保護連盟.

- 森岡照明・叶内拓哉・河田 隆・山形則男. 1995,  
図鑑日本のワシタカ類. 194pp. 文一総合出版.
- 山崎亨, 2013. クマタカの保全と森林管理 (樋口広  
芳 編) 日本のタカ学. 281-299. 東京大学出版会.
- 山崎 亨, 2010. 生態図鑑 クマタカ .Bird Reserch  
News, 7(12): 6-7.